



## 我が故郷が 消滅都市!?

● 伊藤 隆夫

国労東日本本部 執行委員長



▼先日、久しぶりに法事があり帰省した。法事後の会食で、どこからともなく銚子が「消滅都市なんだって!」という会話が聞こえてきた。その場は聞き流したが、「はて?」の疑問が残り少し調べてみた。

▼報道によると、「有識者でつくる人口戦略会議が全国の自治体の持続可能性について『分析レポート』を公表し、千葉県内では22市町があげられ、わが故郷の銚子市は消滅可能性自治体に分類された」とのこと。(なお、この種のレポートは10年前にも公表され、その時も消滅可能性自治体に分類されたとのことである。)

▼ところで消滅可能性自治体とは何か?であるが、「人口減少により近い将来消滅の可能性のある自治体で、今回の分析は2020年から2050年までの30年間で、20歳から39歳の若い女性の人口が50%以上減少すると推測される自治体を指す」そうである。

▼では、わが故郷の場合どのくらいのスピードで人口減少をしたのか?市のHPで公表されている人口の推移では1965年の人口「約9万5千人」(ちなみに、私は1963年生まれ)をピークにその後減少を続け、2023年では「約5万5千人」となっている。また、今回の試算では「2020年には『約4千3百人』の若年女性が2050年には『約1千4百人』となり約67.5%の減少が見込まれている」とされている。

▼しからばこの10年「市」は何をやっていたのか?「市」によると厳しい財政事情の中で、こ

れまでも子育て支援策を行ってきたが、今年度からは子育て支援策としての市立の小・中・高の給食費無償化、幼稚園・保育園児の子供1人当たり月6,500円の補助を始めたそうである。

▼一方、報道では消滅可能性自治体から脱却した自治体も紹介し、ある村では、子育て支援策・定住支援策・企業誘致を進め、得られた税収をさらなる子育て支援策に重点的に充てるとしている。首長は「妊娠してから産後に至るまでのケアや、小学校から高校までの入学祝い金制度などの子育て支援を充実されたことで『選ばれるまち』になった」としている。

▼話が広がり治いなので、本題に戻す。私が子供時代は「市」の人口はピークであったらしい。たしかに生まれた場所は市街で生家も電気屋を営み、近所には八百屋・精肉店などの個人商店があり、少し歩けば商店街、映画館、飲食店と賑っていたと記憶しているが、今はその面影はない。たまに帰省して賑っている光景に遭遇するのは、グルメ番組で紹介された食堂くらいのものであり、多くがシャッターに閉ざされた光景は寂しい限りである。

▼私自身、働く場を求めて市外に出た身であり偉そうなことは言えないが、「消滅可能性自治体」からの脱却に向け、県や地元自治体・企業、移動に欠かせない公共交通機関が一体となった取り組み、そして「市」を盛り上げるための住民・若者の奮闘に期待し、陰ながらそのサポーターとして応援をしたい。